

きらいな人をただ遠ざけるのではなく、思いもよらないようなすばらしいアイディアを出して、まったくちがった解決方法でマミヤくんを助けてあげられるすてきな女の子。もし自分がそんな女の子だったなら……。

メアリーはいつも、なりたいた自分のすがたを細かいところまで想像してから眠る。そのすがたは決まってスナミさんに似てしまうのだけど、髪型だけがちょっとちがう。

スナミさんは肩までの長さ、空想の中のメアリーは背中まで届くロングヘアだ。

もし自分が、スナミさんに似たあのかわいらしい十二歳の女の子のすがたでマミヤくんに出会っていたとしたら？
メアリーは、スナミさんがカセくんと待ち合せをしていた赤い屋根のパン屋さん《アベイユ》で、肩をならべてパンを選んでいる自分とマミヤくんを想像してみた。

マミヤくんは学校でミヤタクンやシンドークンからイヤなことをされているのだけれど、メアリーには、学校はまあまあ楽しいかなって話している。

メアリーは、マミヤくんが本当は学校でイヤな思いをしていることを知っている。知っているけれど、わざと気がついていないふりをして、ふたりでいるときは楽しく過ごすって決めてる。

そうしてふたりですごすつかのまの時間が、マミヤくんにとってもメアリーにとってもかけがえのないものになっ

ていく中で、少しずつ、マミヤくんは変わっていく。

わけがわからないイヤガラセをしてくるやつらのことなんかどうでもいいじゃないか。自分には、メアリーっていうすてきな友だちがいる。おたがいのことをとても大切に思っていて、いっしょにいる時間を心から楽しむことができている。

マミヤくんがそう思えるようになると、ミヤタクンやシンドークンたちも不思議とマミヤくんには興味をなくしたようになっていって、だんだん教室にいるときの空気も変わってくる。

そうになると、前は無性に気にさわる相手だったカセくんのこと、じつはいいやつなのかもって思えるようになってきた。

マミヤくんは、教室にいるのが少し楽になった、と思うようになる。

そうすると、メアリーといっしょに過ごす時間もますます楽しくなって――。

うっとりしながら空想の世界をさまよっていたメアリーは、下水道を流れる水の音が急に激しくなったのにびっくりとなって、ふいに我に返った。

現実にもどってきてみれば、スナミさんによく似たかわいらしい十二歳のメアリーなんて、どこにも存在していない。